

異説SF超次元伝説ラル

ラモー・ルーの夜 第一夜

ラモー・ルーの夜 第一夜

ラモー軍団は捕虜を捕らない。「敵兵は皆殺し」を常としているからだ。しかし、ラモー・ルー城内には多くの石牢があった。それは昼の地から掠ってきたラモー・ルーの慰み者達を閉じ込めておく為に作られたのだった。

その石牢のひとつ、中に設えられた粗末な造りのベッドの上にキャロンは寝かされていた。

「……、うううん……」

キャロンが目を覚ます。

「ここは……どこ？……」

石牢内にこもったカビ臭いにおいに顔をしかめるキャロン。その嫌な臭いが気付け薬代わりになり、だんだんと意識がはつきりしてくる。

ベッドの上で身を起しながらキャロンは鈍い重さを感じる。見ると手足には枷がはめられ、そのまま視線を滑らすと体に身に付けている物はなにもなく、ラモー・ルーに伝説の

剣士の衣装を引き裂かれた時のまま、全裸だった。

「……」

股間には無理矢理こじ開けられ、蹂躪された感触がまだ残っており、ラモー・ルーに処女を奪われた悔しさにキャロンは唇を噛む。

それと同時にあの時の事を思い出すと、体の奥で疼く何かキャロンの手を無意識に下腹部へ、そしてその先の恥丘へと導いていった……

突然、ガチャリと石牢の重い扉が開き、黒いローブを着た二人が入ってくる。

「あっ！」

キャロンは両手で大事な部分を隠しながら二人を睨みつける。

「ラモー・ルー様がお呼びです」

そう言いながら、黒いローブはキャロンを連れ出そうと掴みかかる。

「いやっ！ こっちにこないで！」

キャロンは両腕を振り回し抵抗する。少女のささやかな抵抗をかくぐり、黒いローブが指先でキャロンの額を軽く触るとそこには小さな紫の紋様が付いた。そして次の瞬間、キャロンの体から力が抜け、まるで操人形の糸が切れたようにその場に座り込む。

「……なに？ ……これ……あっ、っ……」

キャロンは体が痺れて動かない、声も出せない。魔力によって麻痺させられたのだ。黒いローブ達はキャロンを抱え上げ、石牢から運び出す。

黒いローブの二人に先導された輿こしがラモー・ルー城の大回廊を進んでいく。輿こしには担ぎ手がいなかった。魔力によって制御されているのだろう、空中に浮かび音も無く先を歩く二人についていく。輿こしの上には白い裸体を晒さらしたキャロンが、大きく脚をM字に開かされた格好で座っていた。それはまるで魔王に捧げられる生贄いけにえが運ばれていくようであった。大回廊を行き交うラモー軍団の魔物達は輿こしに気付くと道を空け、その場に恭うやうやしく跪ひざまずく。キャロンが主であるラモー・ルーへの貢ぎ物だと解っているのだ。しかし、魔物達のギラついた眼はじっと少女の柔肌を見つめ、舌なめずりしていた。

「……、……」

体の自由を奪われたキャロンはその辱めに為すすべもなく、ただ一筋の涙を流すしかなかった。

キャロンが運ばれてきたその部屋は、そこかしこにヌメっとした粘液状のものがこびりついた石壁で囲まれ、天井を支える石柱には大蛇が絡みつくような彫刻が刻まれており、

その影が壁に掛けられた燭台の炎の揺らめきでゆらゆらと動き、まるで生きてるように見えた。

部屋に入った瞬間、中の生暖かい籠すえた空気がべっとりとし全身に絡んでくるような感触にキャロンは、魔物に吐息を吹きかけられた気がして鳥肌が立った。

「お待たせしました。ラモー・ルー様」

部屋の中央、床石の隙間から黒い液体が滲しみ出してくる。すぐにそれはドクドクと脈動するように湧き出し始め、やがて液体は徐々にドロドロとしたゲル状に変化すると山のよりに盛り上がり、ゆっくりと人の形を成していく。……ついにはラモー・ルーがそこに立っていた。

「〜〜！　〜〜！」

犯された時の恐怖と悔しさと、今また再びラモー・ルーに穢けがされる絶望がない交ぜになった感情から声にならない声を出すキャロン。

「待っておったぞ、伝説の剣士どの……、いや、麗うるわしきその姿の姫君に剣士と呼ぶには失礼かな、フフフフ」

黒いローブの一人がキャロンを興こから降ろし、彼女の両手両足にはめられた枷を天井から何本も垂れ下がっている鎖に繋ぐ。それを確認したもう一人が壁から生えた数本の取っ

手のひとつを下に押し込むと、どこからかギリギリと金属の擦れる音が聞こえ始め、……ジャラリ、キャロンの両腕に繋がれた鎖がゆっくり引き上げられた。

空中にYの字の形に吊り下げられたキャロンに黒いローブが近づき、彼女の額に印した紫の紋様に指先で触れると、それは蒸発するように消え、同時にキャロンの体の感覚も元に戻った。

「く……っ、放して！ いやーっ！」

体の自由を取り戻したキャロンが縛めから逃れようと体を揺する度、ガチャガチャと鎖が鳴る。

「体力は十分に戻っておるようだな。フフフフ」

ラモー・ルーがキャロンの顔を覗き込む。

「いやっ、近寄らないで！」

顔を背けるキャロンの顎を掴むと力尽くで顔を自分に向けさせるラモー・ルー。

「怖れることはない、これからじっくり可愛がってやろうというのだ」

妖しく輝くラモー・ルーの眼に、はっとするキャロン。

(だめっ！)

魔王の幻術に捕らわれまいと、キャロンはきつく目を閉じる。

「おまえに幻術などもう必要ない……フフフ」

そう言うと、ラモー・ルーはその太い舌で強引にキャロンの唇をこじ開け、彼女の舌に絡ませる。

「っ、んぐっ……あぐっ、……」

ねっとりとしたラモー・ルーの舌の動きに翻弄されるキャロンの舌。しかし苦痛はなく、その動きはキャロンにディープキスを教えるかのようにであった。

「……んっ、あああっ………はあ、はあ、はあ………」

長い口淫を終え、キャロンの唇を解放したラモー・ルーの舌はキャロンの首筋を一舐めすると、まだ成長途中の小振りな胸を次の獲物に定める。

今度は蛇の様に長く伸ばされた舌が乳房に巻き付く。

「ああああっ！」

キャロンの胸にボタボタと滴り落ちた唾液がローションとなって、ヌルヌルと乳房を絞るような動きを繰り返しながら、舌尖ではチロチロと乳首を刺激する。

やがて、ラモー・ルーの舌の淫らなマッサージに乳首を硬く尖らせてしまうキャロン。

「はああ、……だめえ、……いやああ………」

そのタイミングを待っていたかのようにラモー・ルーの細長い舌がすばやく乳首に巻き

「付き、きつく締め上げる。」

「きゃあああああ…あん…！」

悲鳴を上げるキャロン。しかしその悲鳴には艶が混じり始めていた。

キャロンの体をその大きな両手で掴み、舐め回しながら、ラモー・ルーは部屋の隅に控える黒いローブに目配せをする。

壁の取っ手を操作する黒いローブ。軋む金属音と共にジャラジャラとキャロンの足枷の鎖が引き上げられた。

キャロンは空中で大きく脚を開いた体勢にされ、丁度ラモー・ルーの顔の前にキャロンのぷつくりと合わさった大陰唇が位置していた。

「い、いやああ…！」

「おまえの蜜壺はどうなっておるか、見せてもらおうか？フッフ」

ラモー・ルーは指に唾液を絡めキャロンのクレバスに沿って愛撫する。程なくそこはピチャピチャと淫らかな音を立て始め、顔を覗かせたクリトリスを舌先で舐る。

「ひっ、あああっ！」

指で擦り上げながらゆつくりと花卉が開かれていくと、ヒクヒクとヒクつくキャロンの

蜜壺の入口が現れ、そこからは見た者を誘惑するかのように愛液が滲み出していた。

「美味そうな蜜をもう滴らせておるではないか、フフフフ」

ラモー・ルーはキャロンにむしゃぶりつく。ブチュル、ジュルル、下品で大きな音を立てながらその可憐なラビアを舐め上げていく。

「だめえっ……ああああ」

さらに蜜を求め、ラモー・ルーの太い舌がキャロンの蜜壺の奥へと挿入される。

「ああああっ！」

キャロンの胎内でうねるように蜜を吸い取っていく。

「なんと甘美な蜜であろうか……」

「ああっ、あああああん！ いやあああっ」

激しいラモー・ルーのクンニリングスから逃れようとキャロンは体を揺らす。

ラモー・ルーはそれを許さず、キャロンの腰を両手でがっちり掴むと、舌を細長く変形させ、内壁を探るように動かす。

「っああ……、ああああっ！……ああ、……っあああん！」

キャロンのGスポットを探り当てたラモー・ルーはそこに攻撃を集中する。

「ああ！ ああっ！ いやああっ！ ……ああっ！ああああっ！」

体を突き抜けていく未体験の快感に、キャロンの意識が飛んでしまいそうになったその時。

「……プシュツ、プシャアアアッ！」

「はっ、あ……あああああああゝ！」

キャロンの花弁から液体が勢いよく噴き出す。体の痙攣に同期するように潮が吹き上がり、ラモー・ルーの顔を濡らす。それを一滴も残すまいとラモー・ルーの舌が舐めとっていく。

「すばらしい……、蜜だけではなく、なんと美味な聖水を持っておるのだ、この娘は。フフフ。」

初めてオルガスムスを迎えたばかりか、潮まで吹いてしまったキャロンは放心状態にあった。

「はあ、……はあ、はあ、ああ……はあああ」

ラモー・ルーはキャロンを繋いでいる鎖を解くと、石造りの丸い台に横たえる。キャロンは石台の上で、ラモー・ルーのされるがまま、脚を大きく開かれる。

「まだ足らぬであろう？　すぐに次をやろう……」

ラモー・ルーはキャロンの乳房を揉みしだくと、彼女の小さな体の上に覆い被さる。

「あああ……」

キャロンは股間に何かが触っている感触に目を向けるとラモー・ルーがペニスで彼女の恥丘を愛撫しているのが見えた。

(いや！ もう二度とラモー・ルーに犯されたくない！)

キャロンがそう思っても体の力が抜けてラモー・ルーを拒否できなかった。いや、幼い彼女はまだ気付いていなかった。体の方は更なる快楽を求めていたことを……。

グチュル、……ペニスの亀頭部がキャロンの蜜壺の入口に埋まったところで止まる。

「ひっ……くっ！」

ペニスに比して入口が小さいこと、キャロンが挿入を拒んで力が入っていることも相まって、ラモー・ルーの侵入を阻んでいた。しかし、キャロンが息を吐き、力が抜ける一瞬をラモー・ルーは見逃さず、胎内奥へとペニスを殺到させた。

「あああああっ！」

キャロンの上げる鈴すずの音ねのような悲鳴を楽しむかのように少しの間を置き、ラモー・ルーは少女の胎内なごの具合あはれを確かめるようにゆっくりと亀頭を前後させ始める。

グジュツ、グジュツと淫靡いんぴな音を立てながら、魔王のペニスが少女のまだ幼く瑞々みずみずしいヴァギナを舐なぶっていく。

「ああっああっああっ！」

「力を抜き、体を委ねるのだ。そうすれば膣内なで暴れているこれはもっとお前を気持ち良くさせてくれるぞ？ フフフフ」

ラモー・ルーはねっとりとした動きでキャロンの体に牡おすの味を覚え込ませていく。時折、外に顔を出すペニスは愛液にまみれ、トロトロになっていた。

「あん！ ああ！ いや、ああっ！ あん！ あん！」

キャロンの流す愛液が良い潤滑油となつて、ペニスのピストン運動が徐々にリズムカルなものに変化していく。

「あん！ あん！ あん！ あん！ あん！」

子宮に亀頭が激しく打ちつけられる衝撃に意識が蕩けそうになるキャロン。

「ふふふ、どうだ、なかなか良い具合になってきたのではないか？ キャロン」

ラモー・ルーはキャロンの腰を動かし彼女の花卉が天井を向くようにすると、更に深く強くペニスを挿入する。

ズツチュ、ズツチュ、ズツチュ！ 子宮に杭を打ち込まれるような暴力的な挿入。しかしそれは再びキャロンを絶頂へと誘う。

「ああっ、ああっ……きもち、いい……あっ、あっ！ あああああっ！」

淫欲の沼に囚われ始め、恍惚こうこつの表情を浮かべるキャロンにしばし見とれるラモー・ルー。

「フフフ、なんと美しい……」

ペニスを激しく動かしながら、キャロンの顔を愛でるように撫でるラモー・ルー。

ラモー・ルーのペニスがドクドクと大きく脈動し始める。

「いつ、く……あああああああああああああゝ！」

キャロンのオルガスムスに合わせラモー・ルーも射精する。

「あああ、あああ、はあ……ああ、あ……熱、い……はああゝゝ」

ラモー・ルーの熱い逆ほろほろりが膣の奥に浴びせられ、それが更なる快楽を与え、キャロンはピクンピクンと体を震わす。

「はあ、はあ、はあ……はあ、はあ……」

石台の上に横たわったキャロンは施された魔の性儀せいぎの余韻から小さく荒い息をしていた。その傍かたわらに立つラモー・ルーはキャロンの美しく濡れそぼった花卉から自らの精液と彼女の愛液とが混ざりあって滴したたりり落ちているのを満足げに眺めていた。

「さすがは伝説の剣士として選ばれた者よ。……なかなか良い原石を手に入れたフッフ。壊してしまつては元も子もない、今宵こよひはここまでとしておこう。キャロンを石牢に戻

しておけ、……丁寧にな」

「御意。」

ぐったりとしたキャロンを輿こしに載せると、黒いローブ達はラモー・ルーに一礼し、部屋から出て行く。

石牢へと元来た道を進む、黒のローブ二人とキャロンを載せた輿こし。

体が自分のものでなくなるような、意識が飛んでしまうような快感を初めて体験したキャロンは、未だその余韻から醒さめずにいた。そのため、来た時と同じ淫みだらな姿で輿こしに乗せられていても恥じらうことなく、再びその幼くも美しい体は大回廊を行き来する魔物達への見世物となっていた。

肌にはラモー・ルーとの情事の痕あとが残り、蜜壺からは精液を滴したたらせたキャロンから仄ほのかに漂う牝めすの臭いに誘われ、巨大な体の一つ目の魔物が近寄ってくる。

「その娘、俺にくれ」

「控えよ！ これはラモー・ルー様のものだ」

「ラモー様が手を付けた後は俺たちがいただけのはずだろ？ ……さてはおまえたちで楽しむつもりか？ そいつは俺が使う！ 俺によこせ！」

魔物は輿こしの上のキャロン目掛けて腕を伸ばす。

「やめよ！」

黒いローブのひとりがそう言った瞬間、電撃が走り、魔物の片腕が消し炭になっていた。

「ギャアアアアア！」

大回廊に響く魔物の悲鳴を後に何事もなかったようにキャロンを載せた輿こしは進んでいく。

「ラモー・ルーの夜 第一夜」おわり